

令和 5 年 度 自 己 評 価 表

鳥取県立岩美高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	岩美高生としての誇りと自覚を持ち、何事にも「誠実」に対応でき、他者と「協働」して物事に取り組み、夢に向かって「果敢」に挑戦する人間を育成する。	今年度の重点目標	1 「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現 2 「人間性」の育成 3 地域と連携した学校づくりと魅力化
-------------------	---	----------	--

年 度 当 初				評 価 結 果 (2) 月		
評価項目	評価の具体項目	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 「学力」＝ 「学ぶ力」の向 上と進路実現	学力の向上と学習習慣の確立	・学校評価アンケートの「学力の向上感」に係る問いに対する肯定的な回答の割合が保護者・生徒ともに80%以上。 ・1、2年生基礎力診断テスト(12月)において、D3ゾーンの生徒数が年度始めから50%以上減少している。 ・学校評価アンケートの「一人一人を大切にしたいわかりやすい授業」に対する保護者の肯定的な回答の割合が80%以上。 ・「UDを意識した教育活動を展開している」教職員の割合が80%以上。	・各教科で新1年生の現状の学力を適切に把握した上で、今年の生徒の実態に合うリスタート学習の取組を全体で共有し徹底を図る。 ・基礎力診断テストをはじめとする各テストにおいて、自己採点やテスト直し等の事後学習を各教科で丁寧に指導する。 ・UDを意識した様々な学力層の生徒全員にとってわかりやすい授業を展開することで、学力層の底上げをはかる。 ・教科をまたいでの授業参観の機会をさらに増やし、全教員の授業改善の意識を高める。	・学校評価アンケート(12月)の「学力の向上感」に係る問いに対して保護者の肯定的な回答は77.4%と目標にわずかに届かなかったが、生徒は80.7%と目標を達成することができた。 ・1年生基礎力診断テスト(12月)においてD3ゾーンの生徒数は年度始めから17.8%の減少が見られた。2年生については前回は見られなかったB3ゾーンに上位層が集まっているものの、D3ゾーンは29.2%の増加となっており2極化が拡大している傾向にある。 ・学校評価アンケート(12月)で「一人一人を大切にしたいわかりやすい授業」に対する保護者の肯定的な回答の割合は75.7%であったが、生徒に対するアンケートでは「授業に真面目に取り組んでいる」と回答した生徒は95.2%、また「絵や写真などが使われ分かりやすい授業」に対しても89.8%と肯定的な回答が多かった。 ・「UDを意識した教育活動を展開している」教職員の割合が89%と高い水準になっている。	B	・基礎力診断テストの事前の取組を見直す。実施する時期の検討や教科との連携を深めることが必要。 ・大学進学志望者には外部模試の機会を設定し、入試に向かう学力・意欲を向上させると同時に、定期考査前などに低学力の生徒に補習を行うなど、個々の生徒への対応を大切にしていく。 ・基礎力診断テストについては、結果を生徒に還元できるよう職員の事後学習の機会を設定する。 ・校外研修会などで得た知識や手法を各教科内で共有すると同時に、授業参観の回数を増やし、きめの細かい指導を行っていることを保護者に伝えるように情報発信する。 ・校内巡視の際にいつでも授業に入り参観することで他の教員の白板の使い方を参考にするなど、UDの意識を高め、授業改善の意識を高める。
	生徒が主体的に取り組む授業の工夫	・学校評価アンケートの「授業では、自分の意見や考えを発表する機会が設けられている」に対する生徒の肯定的な回答の割合が90%以上。 ・「授業では、その時間のねらいがはっきりしており、先生が白板に書く内容もわかりやすい」に対する生徒の肯定的な回答の割合が90%以上。	・観点別評価を生かし、生徒に学習の振り返りを促すことで学習に対する意欲を向上させる。 ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価のあり方を検証しつつ、「指導と評価の一体化」の観点からの学習指導の不断の点検を進める。	・学校評価アンケート(12月)では「授業では、自分の意見や考えを発表する機会が設けられている」に対する生徒の肯定的な回答の割合が86.7%と目標まであとわずかである。 ・学校評価アンケート(12月)では「授業では、その時間のねらいがはっきりしており、先生が白板に書く内容もわかりやすい」に対する生徒の肯定的な回答の割合は89.8%でほぼ目標を達成したといえる。	B	・ICTを活用することで生徒が自分の意見を全体に共有させる場面を増やし、また全体の前でプレゼンテーションをする授業構成を推進する。 ・互見授業を推進し、生徒が能動的に取り組める授業デザインと評価について実践と研鑽を積む。
	「自らの将来について主体的に考える」キャリア教育の推進	・進路学習が生徒の実情に応じた適切な時期に行われ、生徒が進路実現に向けて主体的に行動している。 ・「自分の進路実現に向け、資料を集めるなどをして、進路を考えている」生徒の割合が80%以上。 ・第1志望での進路決定率95%。	・進路行事のねらいを明確にし、3年間を通した進路学習の流れの再構築を行う。 ・担任面談と進路専任面談により生徒の進路志望状況を正確に把握し、情報を共有することできめ細やかな進路指導を行う。 ・探究的な学習との往還を通して、自己の在り方生き方を考え具体的に行動を起こす契機となるよう抜本的な進路行事の精選・再編成を進める。	・「自分の進路実現に向け、資料を集めるなどをして、進路を考えている」生徒の割合は7月の学校評価アンケートでは64.5%であったが、12月でも67.5%と目標には到達していない。 ・3年生の第1志望での進路決定率は目標を達成できた。特に就職については1度目のチャレンジで全員合格であった。 ・総合的な探究の時間で生徒は自分の興味がある分野で仲間と協働作業し、その問題を仲間と議論しながら深く調べることで課題を解決しようとする姿がみられた。	B	・生徒の進路実現のために面談を継続し、特に専任面談では生徒の状況に応じた適切な進路情報の提供ができるよう努める。 ・タブレットを活用しての進路指導を進め、進学・就職希望者ともに自分から情報を収集する力を育てる機会を設定する。 ・大学に関する進路便りや学年通信を定期的に発行するなどして、大学の魅力を生徒と保護者に伝え、進学希望者を増やすよう努める。
2 「人間性」 の育成	学校教育活動を通した基本的生活習慣とマナーの確立	・頭髪服装指導において再検査を受けなければならない生徒が10%以下になっている。 ・挨拶、返事、頭髪服装等の基本的生活態度が良好な状態が維持され、生徒の肯定的自己評価が90%以上、職員の肯定的評価が90%以上となっている。	・3年時に限らず進学・就職時の面接試験の場面を意識した進路指導(生徒指導)を行う。 ・生活指導において日常的な学年指導・教科指導と定期的な全校指導を充実させる。 ・指導部ノートを有効活用し、教職員の間での情報共有を進め、組織的な指導につなげる。 ・生徒、保護者に指導状況を丁寧に説明するとともに適時な連携による指導を徹底する。	・3年生については指導のもと進学、就職とも正しい服装・髪型で向かうことができた。 ・頭髪服装検査で再検査となる生徒数がやや増加した。 ・学校評価アンケート(12月)の生徒回答結果をみると、校則やマナーの厳守、挨拶や返事に関する意識は高水準で目標達成はしている(92.0%)が、職員の評価は目標に届かなかった(78.0%)。	C	・継続して進学・就職時の面接試験の場面を意識した指導に努める。 ・全校朝会、頭髪服装検査時に授業に対する姿勢、校則遵守、携帯・スマートフォン使用のマナーについて再度徹底する。 ・些細なことを見逃さないきめ細かな指導は継続して行っていく。 ・学年間で差異のないように頭髪服装の基準を徹底する。 ・生徒の授業に対する意識を高め教室移動を速やかにするよう促すとともに、教員の授業に対しての姿勢を見直す。 ・職員を対象に生活指導研修会等を実施し、生徒指導ガイドラインに沿った生徒指導を徹底する。
	部活動を振興し、健康で心身のバランスのとれた人間の育成	・全生徒が部活動に加入している状態が継続している。 ・部活動に対する満足度が高く、忍耐力、礼儀、自己肯定感が向上している。 ・「部活動は社会人としての力を身につけるのにも役立っていると思う」と回答する生徒の割合が90%以上。	・部活動指導計画に基づいた適切な運営をとおり、技術向上のみならず人間的な成長を支援する。 ・本校の実態及び将来像に即した部活動の精選を進める。	・学校評価アンケート(12月)では「部活動に真面目に取り組んでいる」と回答した生徒が88.0%と高水準である一方で、「部活動を辞めている」が若干名存在し、長期間部活動を休んでいる生徒も含め、学年が把握していないものもある。 ・「部活動は社会人としての力を身につけるのにも役立っていると思う」と回答した生徒の割合は85.7%で目標値をほぼ達成した。	C	・部顧問と学年が情報共有して、部活動を辞める場合次の部活動に加入させる指導を徹底する。 ・顧問会、部長会等の機会に部活動への取り組み方に対しての啓発活動を行う。 ・部活動を通して礼儀、マナー、忍耐力等を身につけさせるという意識を教員間で再確認する。
	多様な生徒を理解し一人ひとりの自己有用感の伸長	・学校が、生徒にとって安心で安全な場所になっている。 ・「学校が安心安全な場所である」と回答する生徒の割合が70%以上。 ・SNSの利用に係るマナーやモラルを守ることができている。 ・「携帯・スマートフォンの学校外での使用時間が多くならないようにしている」生徒の割合が75%以上。 ・周囲に配慮した言動ができるようになってきている。 ・生徒一人ひとりが自己実現を目指し、あらゆる教育活動の中で生き生きと活動している。 ・岩美高版UDを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合が80%以上。	・情報モラル講演会等を早期に実施するとともに、全校集会・学年集会・HR等、あらゆる機会を通じて、SNSの危険性について啓発活動を徹底する。 ・生徒観察及びアセスメントを特別支援教育支援員と連携して実施し、必要に応じて個人面談や個別学習指導を実施する。 ・学年を中心としたケース会議の開催や保護者や関係機関との連携により、効果的な指導・支援につなげる。 ・「教育相談だより」の発行や面談を通した働きかけにより、生徒の自己理解・他者理解を深め、自己有用感を高めるためのヒントを伝える。	・生活満足度調査の結果では、「学校が安心安全な場所である」と回答した生徒は83.6%(5月)、79.6%(10月)で目標を達成した。 ・学校評価アンケート(12月)によると「携帯・スマートフォンの学校外での使用時間が多くならないようにしている」生徒の割合は63.9%で年々減少傾向にあり、携帯・スマートフォンのルールやマナーに係る生徒間の意識格差については、解消にはまだ至っていない。 ・hyper-QU並びに生活満足度アンケートを年2回実施。教員対象にhyper-QU結果を活用した研修会を開催し情報共有を行い、個別支援と集団の中で生徒を育てるための方策を学んだ。 ・11月に「自己理解・他者理解」をテーマにした生徒講演会並びに教職員研修会(高等学校課事業)を実施した。 ・各種アンケート結果から侵害感を覚えたり学校生活に悩みを抱えている生徒を抽出し、学年及びクラスと情報共有をした上で、担任や教育相談係による面談を即応的に行った。 ・学校評価アンケート(12月)の結果によると、岩美高版UDを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合は89.0%であった。(昨年度比+20.3%) ・生徒から寄せられる悩みに係る話題で「教育相談だより」を構成し、毎月発行しストレスや不安との向き合い方をはじめ、心身の健康を図るための啓発に努めた。	B	・生徒の困り感を解消するため、日常の観察や情報共有を細やかに行い、引き続き丁寧に個に応じたサポートを継続する。 ・生徒が自己有用感を高められるような声かけやフィードバックを、すべての教職員が励行する。 ・教師はすべての生徒が学習内容を理解できる授業を目指し、引き続き岩美高版UDを意識した指導や支援、教育環境づくりに継続的に取り組む。 ・多様な悩みを抱える生徒に対応するため、保護者・外部専門機関との連携をより深め、適切に対応する。 ・今年度より配置されている特別支援教育支援員の活動内容を精査し、全職員に周知する。

様式 3

3 地域と連携した学校つくりと魅力化	類型制の発展等も含めた「岩美高校の在り方」構築	・各類型の学習内容の魅力が効果的に発信でき、積極的に地域との交流が図れている。 ・高校が地域の方に誇りを持ってもらえるような存在になっている。 ・地域コミュニティの拠点となっている。	・進路志望を意識した類型選択となるよう、各進路行事を構築する。 ・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を有効に活用し、具体的な地域学校協働活動に着手する。 ・「岩美高校あり方検討委員会」を継続するとともに、議論内容を教職員間で随時共有し、「中学生が行きたくなる学校づくり」を実現するための具体策について検討する。	・1年時の類型選択の時期までに行う進路学習では自己理解に重点を置いたが、職業探究が不十分だったためか進路を深く考えさせることができなかった。 ・岩美高校魅力化CDの力を借り学校紹介アグレッシブビデオや学校案内用パンフレットのデザインをリニューアルし、管理職が中心となって県内外の中学校において積極的な広報活動が行うことができた。 ・生徒の生き生きとした学校生活の様子を画像とともに学校HPでこまめに報告するとともに、県教育委員会公式ツイッターにも随時投稿し、発信している。 ・教育課程委員会等で、学級減に対応した教育課程について具体的な検討が進んでいる。	A	・1年時の類型選択をスムーズに行うために教務・進路・学年の連携を強め、組織的に行う。 ・新類型のあり方については職員間でより明確な共通認識が必要。 ・コミュニティ・スクールを有効に活用し、具体的な地域学校協働活動に着手する。 ・「岩美高校あり方検討委員会」を継続するとともに、議論内容を教職員間で随時共有し、「中学生が行きたくなる学校づくり」を実現するための具体策についてさらに検討する。 ・岩美高校魅力化CDの力を借りて生徒の自主的な地域貢献活動や公営塾、部活動の取組等について全国紙、地方紙で記事化され本校教育活動の地域認知度が高まるように情報発信をさらに進めていく。
	地域探究型学習（イワッツミッション）の発展・充実	・ワーキンググループで出た意見を指導案として提示し、担当教員に具体的に示すことができている。 ・ワーキンググループ内で仕事を分担し、各学年でのクリエイティブな議論につながっている。 ・「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が90%以上。 ・「地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げている」と回答する教職員の割合が90%以上。	・職員会議の後に探究学習学年別担当者打合せを持ち、担当者での意見交換を通して学習指導のプランを協働して作り上げる。 ・資料や意見をGoogleClassroomを活用して会議の場以外でも適宜共有し、プランのブラッシュアップを図る。 ・ICTを効果的に活用して、生徒の成果物を蓄積し、生徒が学びを振り返るしくみを充実させる。 ・岩美高校魅力化CDの配置を地域資源の有効な活用による内容の深化・拡充につなげる。	・職員会議の後に探究学習学年別担当者打合せを持ち、ワーキンググループで議論した案を紹介したり、各担当者同士で意見交換をする機会を持つたりして、岩美高校独自の探究活動を創作した。 ・ワーキンググループの会をこれまでに13回持つことができ（1月末時点）その中で本年度の探究学習の振り返りと、来年度の取組についての議論がよくできている。 ・学校評価アンケートでは「地域と連携した活動にも取り組み地域に貢献したい」と思う生徒の割合が78.9%で目標値には届かなかった。 ・学校評価アンケートでは「地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げている」と回答する教職員の割合は100%と目標を達成することができた。	B	・地域人材や大学生の力を借り、地域とつながることの楽しさや、解決していく学びに対する関心を高める取組を取り入れる。 ・ワーキンググループでの議論の内容を随時教職員と共有し、本校における探究学習の意義及び可能性に係る教職員の理解と意識高揚をさらに図る。 ・探究学習をととした生徒の自己変容の程度を確認するために、事前事後のアンケートを実施し、定性変化を追跡する。 ・コミュニティ・スクールを有効に活用し、地域住民が生徒の探究学習活動により深く関わることのできるあり方について検討する。 ・岩美町役場や岩美町商工会、岩美町まちづくりの会といった地域の団体と連携を密に情報交換や議論をしながら、お互いにとって需要と供給の形ができるように協力を求めている。
4 業務改善	校務分掌、任務分担の見直しと長時間勤務者の解消	・時間外業務時間の年間合計が360時間を超える教職員が令和6年1月末現在で4名以下となっている。 ・前年度はできなかった場面で業務改善のためのICTの活用がなされている。 ・会議を精選し、必要な情報共有のできる場と時間を創出する。	・部活動の計画と実働の一致を促すと同時に、遠征計画は2ヶ月前に立てるように計画性を持った指導を意識づける。 ・教科や分掌でICTの活用事例の共有を進める。 ・衛生委員会での協議を継続し、改善できるものについては関係部署と相談の上、職場環境を整える。	・「授業情報共有スペース」のGoogleClassroomを立ち上げ、ICTの授業での活用事例の共有が進みつつある。 ・時間外業務時間の年間合計が360時間を超える教職員は令和6年1月末現在で3名となっている。大会引率等により時間外勤務時間が多くなる場合、振替休日の取得を促すとともに、泊を伴う生徒引率に係る変形勤務時間の設定等を積極的に講じている。 ・衛生委員会での協議事項について、校内掲示板にて直ちに報告・共有するとともに、重要課題等については職員会議等を活用して教職員で共有し、業務改善についての自覚を促している。 ・職員会議を短縮し探究学習の進め方についての情報共有の時間を確保している。	B	・教員定数減に伴う職員の業務負担の実態や可能な業務削減策について情報を収集するとともに、その情報を踏まえて衛生委員会等でより効果的な対策等について検討を進める。 ・全学年が端末を所持することを好機ととらえ、ICT活用の職員研修を実施するとともに職員の利活用の例を共有しやすいしくみを作る。 ・泊を伴う生徒引率に係る変形勤務時間の設定等を年度当初から積極的に講じるとともに、職員全体に周知を図り当該職員が定時退勤しやすい環境を整える。

評価基準 A：十分達成 B：概ね達成 C：変化の兆し D：まだ不十分 E：目標・方策の見直し
〔100%〕 〔80%程度〕 〔60%程度〕

〔40%程度〕

〔30%以下〕